

六ヶ所村長選、告示日まであと1週間、山田清彦さん、村内を精力的に街宣中です。 核燃に頼らない村づくりを強く訴えています!!

7日の告示日までいよいよあと1週間（投開票は12日）となり、山田さんは精力的に村内で街頭演説中です。

選挙運動期間中も反核燃の講演や各種イベントに取り組みながらも連日、村民のみなさんに再処理事業の中止や、それに代わる地域おこしを訴えています。具体的には村の基本産業である農漁業の6次産業化により、農畜産物・水産物の生産（1次産業）だけでなく、食品加工（2次産業）、流通・販売（3次産業）にも取り組み、それによって農林水産業を活性化させようと訴えています。

ただ、街宣車運行のためのボランティアスタッフが不足しがちな状況が続いています。多くの支援する方々のご協力をお願いします。

《事務所開きマスコミ報道》

河北新報で大きく取り上げられました。

21日の事務所開きは地元2紙でも翌22日に取り上げられましたが、河北新報（本社：仙台市）が28日、かなりのスペースを割いて取り上げました。著作権上、そのまま転載できませんが、その要旨は以下の通りです。

完工延期濃厚「事業は破綻」処理水放出、青森にも関心を

という見出しで始まり、事務所開きでは、以下の点を主に主張したと報じています。①再処理工場が完工延期により、税金や電気料金の一部が事業費に注がれる現状を憂い、国民負担を考え、ここでやめさせなければならないこと。②再処理事業で発生する処理水に含まれるトリチウムは、再処理工場が06～08年に行った試運転では、約2,150兆ベクレルと東京電力福島第1原発の総量約860兆ベクレルに対し約2.5倍が海洋放出された。本格稼働となれば、はるかに上回るトリチウムが海洋に流出する見込みであること。…陣営では「福島はトリチウム汚染水問題の議論が活発にされているが、青森では俎上にも上っていない。この選挙は広く関心を持ってもらう好機」と捉える。

また、高レベル放射性廃棄物の最終処分場選定を巡り、36年ぶりの選挙となった2月の北海道神恵内村長選で、大敗した瀬尾英幸さんも列席し、立候補の意義を訴え、「無風では何も変わらない。選挙を通じて議論を巻き起こすことに意味がある」と述べた。

自治体の財政基盤の強さを示す財政力指数（2020年度）は六ヶ所村が1.79で県内トップ。原子力関連施設の立地がなく、指数が最も低い0.1の風間浦村とは18倍の差がある。「原子力マネー」が村に潤いを与えてきたのも事実だ。…と結んでいる。



◀◀こんなエールが届きました▶▶ 再処理工場竣工の危険を明らかに！

原子力資料情報室 共同代表 伴 英 幸

5月11日に六ヶ所村を訪問し、環境放射能測定のための試料を採取しました。適切な採取地点に関する案内は、六ヶ所を環境の点からも歴史の面からも詳細に把握している山田清彦さんしかいないと、彼にお願いしました。

六ヶ所再処理工場からの放射能放出は原発1年分を1日で放出するほど多量です。そこで、竣工前にバックグラウンドのデータを把握しておきたいと今回の試料採取を考えました。これまでも、こうした試みがありましたが、同工場の竣工が延期を重ねているため、継続的な調査になりませんでした。ただ、今回は2011年3月の福島第一原発事故によるセシウム汚染が広範囲に広がっているため、その影響を検知できるかもしれないと思っています。微量すぎて検出できないかもしれませんが…。

セシウムやトリチウム測定用として3地点で海水を取りました。セシウムやヨウ素の測定用に松葉の採取、海砂、土壌も取りました。さらに、大気中のセシウム、ヨウ素、トリチウムの測定試料も作成しました。

3年ぶりに六ヶ所を訪れ、山田さんと旧道を走りながら、いろいろと情報交換しました。今回、六ヶ所村長選に立候補されると聞きました。ムダでキケンな再処理工場の廃止のために奮闘していただきたいと当選を祈願します。



川内原発の地元、いちき串木野市議会議員でもある反原発イラストレーターの高木章次さんからこんな絵ラスタが届きました

六ヶ所村使用済み核燃料再処理工場の全貌



前回、前々回に続き、選挙事務所として自宅を提供している種市信雄さんをご紹介します

1935（昭和10）年、六ヶ所村泊地区生まれ、地元の泊郵便局に勤務。1969年、新全国総合開発の一環として「むつ小川原開発計画」が浮上、当時、社会党代議士だった米内山義一郎さんの話を聞いたのをきっかけにこの計画に疑問を抱くようになりました。また、地元が巨大開発構想に揺れるなか、村が先行地事例視察として行った茨城県鹿島臨海工業地帯視察に参加したことだと言います。鹿島の港では漁船がボロボロになって放置され、漁港が廃れたところを目の当たりにし、開発と漁業が両立しないと感じたことでした。

そして、1971年に「泊漁場を守る会」を結成、その後、1984に核燃料サイクル施設の建設計画が浮上すると、「泊漁場を守る会」を「核燃から漁場を守る会」に改組、コンブ漁などを続けながら自宅を反対運動の拠点として開放し、反核燃活動の先頭に立ちながら今日に至っています。

巨大開発の挫折が核燃施設へと変貌し、地域の未来が単に経済構造の問題だけでなく県民の命までも危険に晒すことになった今、闘いの決意は一層強固なものとなっています。



自宅での種市さんと、種市さんの販売する一級品の泊産昆布です。この昆布は一度だけでなく二度だしを取れます。

全国からの支援者の集結場所としてご自宅を提供されている菊川慶子さんからのメッセージです

公約を読んで嬉しくなりました。農業を使わない安全な食べ物を作っているのに、猛毒物質がすぐそこにある。地震がある度に怖くなります。

いまある危険だけでも対処できないのに、これ以上増やしてどうするんだ。子ども達のためにできるのはただひとつ。それは再処理工場を動かさないこと。

六ヶ所村の自然を豊かなままで子ども達に残したいと思うのです。

山田清彦さんの公約に心から賛同します。



【菊川慶子さん】1948（昭和23）年生まれ、3歳より六ヶ所村育ち。1964年、集団就職で東京へ。1986年原発問題に関心を持つようになる。六ヶ所村が核燃施設の放射能で故郷が汚染されるという危機感から帰郷を決意。1990年、六ヶ所村へ帰郷。以後、六ヶ所村核燃サイクル基地の建設・稼働中止をもとめて、地元住民として粘り強く運動を続ける。8年前は自ら村長選へ挑むなど「核燃に頼らない村づくり」にチャレンジしています。



山田清彦さんが率いる全国からの「六ヶ所・下北スタディツアー」では必ず菊川さん宅を訪れ、現地の状況などを報告しながら市民交流を深めています。

選挙事務所には多くのみなさんからの為書きが届きました

